

---

# 異世界でした！

ぽち子。

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異世界でした！

### 【Nコード】

N4454P

### 【作者名】

ぼち子。

### 【あらすじ】

失恋からの翌朝、いつもの煎餅布団とは違う、スポンジケーキのようにふわふわした感触で目が覚めたら……そこは異世界でした！？

なんて非現実的なことあるはずがないのに。

私一体どうしちゃったの！？ここはどこ！？とパニックになっていると、隣で寝ていた美形男さんは不可解なものを見る目。

……どうやら私、異世界トリップしてから8年は経っているそう。異世界トリップなのか記憶喪失メインなのかいまいち解らないけ

ど、とりあえず夢ではないみたいです。

短編の「異世界の朝でした」の連載です。（1は短編と同じものです。）

今のところ恋愛の要素は薄いですが、今後は恋愛？も絡む可能性があります。

不定期連載ですが、よかったらお付き合いください。

ああ、憂鬱な朝だ。瞼が重いのはきつと昨日泣いてしまったせい。私は昨日失恋した。よりによって私の親友とくっつかなくてもいいのに、と何度恨んだ事か。

好きな人だった彼と、親友だった彼女の痛々しいぐらいに悲しそうな表情は脳裏にくっきり焼きついてしまった。

一度に恋も友情もなくなったようなもの。いくらポジティブが取り得のタフな私でも、そりゃきついつて。

うだうだ言っけていても仕方がない、と潔く目を覚まそうとしてようやく違和感に気付いた。

……私の布団、こんなに柔らかくないんですけど。

年代物のマイ煎餅布団ではなく、まるでケーキのスポンジの上のようにふかふか、いやもうふわっふわだ。

ホテルだってこんなふわふわは一流ホテルの主にセレブが泊まる部屋ぐらいしかないんじゃないだろうか、ってそうじゃなくて！

ぱっちり目を開けると、まず高い天井が見えた。勿論家の天井はこんなに高くないし、白くない。

がばつと起き上がって、辺りを見回すと高そうな調度品の数々……

まるでテレビの特番で見た最高級スイートルームのようだ。

私の部屋の何倍だろう……軽く、5倍？10倍？もつとか？

平凡な築18年の二階建て一軒家の我が家全体の敷地にしても足りないんじゃないですかっけぐらいに広い。無駄に広すぎる。

てええっ？ここどこよっ！？

驚きすぎて叫ぶのも忘れて、しばし茫然。一応心の中では叫んだけど。

ちよっと待って、落ち着いて考えてみても昨日は落ち込んで早々

に布団をひいてもぐり込んだはずだ。それは間違いないはず。

だとしたら誘拐？まさか、こんな平平凡凡の一般人を誘拐して何の利益があるというのだろうか。

ちなみに私が絶世の美女なんてことも、大変虚しく悲しいけどない。どうみても純日本顔でどこにでもあるような顔立ちだし。

かといって先程紹介したように家はお金持ちというわけでもない。親父のビール代が一本カットされちゃうぐらいだしね。

だとしたら何だ、私ってば見知らぬお家に気が付かないうちに潜り込んだ！？

「……随分と、今日は早起きだな」

茫然とする私の耳に気だるげな、それでも充分な低い美声が届く。はつと隣をみると、今起きたのか男が起き上がって大きく腕を伸ばしていた。

こんなふかふかで広いベットなのに身体が凝ったのだろうか……ってそうじゃなくて。

誰だ、この美形は。正直あまり見たことのない美形男だ。目鼻のはつきりした俳優のようにカッコイイ外国人みたい。

こいつが私を手籠めにしたとは考えにくい。正直ここまで美形なのに私みたいな容姿の女に手を出すなんて考えにくい。

まさか私なのか？私が恥女なのか！？

頭を文字通り抱えた私を、美形男さんは整った眉を寄せ訝しげにコチラを見ている。

「寝ぼけているのか？」

ああ、夢であるならどんなにいいか。夢であって欲しい！

そう願って自分の頬を抓る。残念ながらこの痛みは夢でない。

目の前の私の行動に、美形男さんは奇妙なものを見てる目つきだ。

「おい、サシャ？」  
「え？」

……サシャって言った？ちなみに自己紹介が遅くなったけど、私の名前は今野さや。  
外国人が『さや』の発音がしにくくて『サシャ』っていう風に聞こえなくもない。  
ということは知り合い、なのだろうか。考えないようにしていたけれど、今まで……一緒に寝ていたよね？

「……まだ、怒っているのか」  
「ええつと……」

どういう意味だ。私の乏しい記憶ではこの美形さんにたいして怒ったことはないはずだけど。

返す言葉がなく沈黙したのを肯定と誤解したのか、ますます機嫌が急降下するかのように眉間の皺が深くなる。

美形がそういう顔を見ると、かなりの迫力で怖いって！後ろに黒い見えてますよー！！

「あの！むしろ何が何だかわからないんですが！」  
「……は？」

「だから、どうして自分がここにいても、貴方が誰かも全くわからないんだって！」

思い切っただけのまま言った、ついに言ったぞ！！  
美形男さんは私の言葉に、固まった。やはり訳がわからないといった様子だ。

「お前は何を……昨日のあてつけか？」

えええっ！？なんでそんなに怒るんですか！？

最早迫力だけではない。怒りのオーラが見える。さすが美形はオーラさえも手足のごとく操るのか。

オーラに怯えつつ、負けじと私は叫ぶ。

「あてつけじゃないって！本当の本当に訳がわからないんだってば！」

痛い沈黙だ。そりゃそうだ、いきなり隣で訳のわからない話をしだすんだから。

ていうか、本当この人とはどういう関係な訳？

観念したかのように、美形男さんは私の前に手をやって制止した。

「ちょっと待て……一応聞くが、自分の名は分かるのか？」

「今野さや……」

ぽつりといった私の言葉に美形男さんは一瞬いぶかしんだけど、はっと何かが思い立ったようだ。

……まあ読み取れるほど表情が大きく変わっていないから、おそらくだけど。

眺めていると美形男さんは私の肩を掴んで身を乗り出してきた。

ち、近いって！！

「今、自分の歳はいくつだ？」

「え、16、だけど……」

「16……」

誕生日はこの前の春に迎えた。高校入学して直ぐの頃……今は夏

よね？

首周りが暑苦しく感じて気付いたけど、髪の毛長くない？高校入学のときにばっさり肩に付かないぐらいまで切ったはずなのに、今は腰の辺り。

こんなに長く伸ばした事ないんだけど、髪の毛の先まで手入れがされているのかツルツルのサラサ髪だ。

まるで自分の髪でないみたいと毛先をいじっていると、美形男さんは突然腕を掴んで引く張る。

「ちよっ！」

「いいか、良く聞け。お前は今、24歳だ」

「……………はい？」

腕を掴まれ引く張られたまま、何畳もありそうな無駄に広いベッソを降りる。

そのまま、化粧台の目の前までいって、鏡にかぶせてある布をとった。

目の前には、もちろん美形男さんと私。私なんだけど、毎日見知っている私じゃなかった。

腰までの長い黒髪にやや大人っぽくなった顔立ち、背は伸びたみたいだし……………ううむ、ペッタンからちよっと手に余るぐらいには胸が育ったようだ。

少なくとも16歳には見えない。むしろ16歳なんて、何歳サバよんでいるんだって話だ。

かなり認めたくないが、紛れもなく『24歳の私』がそこにいた。

「……………いやいやいや、ないから！」

朝起きたら、8年後でした！？そんな莫迦な、じゃあ私の高校生活は？キャハハウフフな青春はどこへ行ってしまったの！？



正しくは憶えていないだけになるのかな？それでも身体は24歳でも、頭の中は16歳だつてば！

それに……自分で言うのもあれだけど勘の良い私は非常に嫌な……もといありえない予感がして頭の中で警報機がなりっぱなしだ。そしてそれこそが最も重要で、私自身を揺るがすものではないだろうか。聞きたいけど、聞きたくない！

「お前は私の妃だ」

「き、妃？」

何の冗談だ、それは。いくら成長をしていたとしても平平凡凡な顔立ちはそう変わらないというのに。

ま、まさか、これが噂の綺麗な人が駄目っていう特殊タイプ？むしろ自分の顔でおなか一杯？

それに妃って……何、その言い方。妃ってつまり……偉い人で、王様みたいじゃない？

目の前の美形男さんが王様であるのは異論がないけど、私がお妃様？

あはははは、まさかそんなこと。乾いた笑みを浮かべるしかない私に美形男さんはさらに言い募る。

「お前は8年前にこの国、こちらの世界に渡ってきた……つまりお前のいた世界とは異なる」

異なる世界、異世界。次元が違う。

そりゃさ、私もそういった類の話読むよ。

異世界にトリップして運良く王子様に出会って保護されて、都合の良いことに恋をして紆余曲折の末ハッピーエンド。

二人は末永く仲良く暮らしましたとさ。

……ってもう終わってんじゃない！私、もう話終わっているところ

じゃないか!?

まったく、そういった定番のことを憶えていないんですけど!

「う、うそでしょ……」

「嘘は言わん。こちらに渡ってから2年後にお前は俺の妃となった」

つまり6年前、よね。18歳……どうしてそんな若くして結婚という大切なことを決めてしまったんだ、私!

まだ心は若いからといって結婚に夢があるわけではないけど、これはあんまりだ。気が付いたら人妻ですか。

いよいよ頭を抱えて悶えたい。むしろ意識を手放して夢ということにしたい。

「それでお前はどこまで覚えている?この世界のことは?……俺のことは?」

じいっと、紫の瞳が覗き込む。

……そういえば見たこともない色。綺麗だなっと思うけど、瞳の奥に焦燥が見えてドキツとした。

うん、でも覚えがない。こんな綺麗な瞳をみたら中々忘れられないと思うんだけどな。

無言で首を横に振った私に、美形男さんは落胆したように見えた。まあ、さつきから言っている通りあまり変化がないんだよね、この人。

とりあえず、恐る恐る手を伸ばしてその鳶色の頭を撫でといた。うわ、髪の毛が嫌味なぐらいにさらさらだし。

撫でられて少し吃驚しているみたいだけど、振り払う様子もないし大人しい。

「……まあ良い」

なんか吹っ切れたのか、疲れたように深くため息をついた。  
私のせいじゃないってば。憶えていないんだから。

「俺は執務があるから行くが、お前は暫くじっとしている」

「執務？そういえば……あなたの名前は」

「ライヒアルト・ヴァン・ウィート。この国の王だ」

疲れたように美形男さん……ライヒアルトさんは言う。

ああ、やっぱり王様なんだ。てことは何て呼べばいいんだろう？  
そんな表情を読んだのか、「ライと呼べ」と素っ気無く言った。

「あのライ……様？」

「ライ、で良いと言っているだろう。直ぐに人をよこすから待っている」

くしゃりと一撫で、私の頭を撫でてから部屋を出て行く。

うー、撫でたときに微かに笑っていたのにちよつとどきつとしてしまった。

本当にここは異世界なのだろうか。確かに部屋の雰囲気は中世的  
だけど見たことがないものもある。

何より、鏡に映った自分は今16歳ではない。受け入れがたいが、  
現実みたい……。

それと本当に私はあの人、ライの妃なのだろうか。……まあ、隣  
に寝ていたいだし。

妃かーでも大国なら他にもお妃様、大勢居るよね。権力者のあり  
がちパターンというか。

って、大切なことを聞くのを忘れていた！

「私って……王妃、じゃないよね？」

まさか自惚れすぎだ、と叱ってくれる人は勿論居ないのである。

こうして私の『8年経った異世界生活』は始まった。

……記憶喪失メインなのか異世界を楽しむのがメインなのか解らないけど、とりあえず私は元気みたいです。

## 1・（後書き）

今野さや

16歳のときに異世界トリップして紆余曲折あつて、ライのお妃様に。

さやが訛ってサシャと呼ばれている。

ポジティブでタフな女子高生だった現24歳。

ライヒアルト・ヴァン・ウィート

ウィート国の王様。さやの旦那様。

超美形の26歳。

お読みいただきましてありがとうございます。

不定期連載になりますが、どうかお付き合いください。

良かったら感想よろしくお願いいたします。

誰だつて一度は夢を見るはずだ。

現実世界に『何か』が起きて次に目が覚めたら、そこは見知らぬ異世界。

こんにちは、美形の王子様と巡る陰謀と甘いロマンス。

素性を疑われたり命を狙われたり王子様の従者とひと悶着おきたりすれ違いながら愛が育まれて、そして二人は結ばれてハッピーエンド。

これは小説単行本一冊どころかシリーズ化されるんじゃないのっという物語を、あろうことかすっ飛ばしてハッピーエンド後の奮闘を描く物語である！

……なんちゃって。

いや一部はなんちゃってじゃないんだけどね！

所謂異世界トリップ初日の朝。正しくは初日ではないらしいけど記憶がないから仕方がない。

どうやらどの世界でも朝というのは変わらないみたいだ。

カーテンからは日が燦々とさしてゐる。ああ、朝日が眩しい。今日は良い天気みたい。

しかし……気が付いたら24歳になっていて、いつの間にか異世界でしたって……。

いや逆か？気が付いていたら異世界でいつの間にか24歳でした？ようするに16歳のはずだったのに8年後で24歳になっていました。記憶喪失なのか、よくある憑依系なのか解りませんが全く以ってこの状況は笑えない。

どの道確かなのは今までの日常は違うことと、恐らく青春を謳歌するはずであったスクールライフは戻ってこないこと……。

そういえば私の記憶中では昨日失恋したんだっけ。

一生の恋と信じていたものと同じくらい大切な親友をなくして乙女チックモードだったはずなのに、失恋の傷なんてどこかに行ってしまったよ、くそう。

詳しい話は前回の話を見てね！と誰かに言ってみたりでそういう訳で、現実逃避はこのあたりにして。

さて美形男さん、もしくは24歳の私の旦那様らしき人で、そもそも一国の主であるライヒアルトさん……ライは仕事があるといっ  
て出て行ってしまった。

このただっ広い豪華な寝室にいるのは事情がまだ飲み込めていない私と目の前のメイド服を着た美人の女の人。どうやらこの人、専任のメイドらしい。

ライと入れ替わりに入ってきたかと思うとテキパキと私の髪の毛を整えた。

気が付いたら、ちょっとボサボサ気味だったのに艶やかになって  
いる不思議。

……それにしてもこの世界の顔面偏差値は総じて高いのかつてぐ  
らいにお目にかかるのが少ない美人。まだ会ったのは二人目だから  
かな。

むしろこの人があの美形男さ……ライ、の隣にたつ奥様でも違和  
感はない。何でメイドなんてしているんだろう？

「サシヤ様」

まじまじと遠慮なく見ていたら、にっこりと笑って私に向き合っ

た。

うーん、やっぱり美人。清楚な感じに美人のお姉さんで、新入生代表で挨拶していた校内三大美女の倉木さんと並べると姉妹みたいに見える！ってそうじゃなくて。

あ、そういえば私の名前は「サシャ」じゃなくて、「今野さや」という純日本人の名前だ。

だけどコチラの世界の人の見た目外国人に似ていることから、おそらく言い難いから「サシャ」なんだろうと思うので何も言わないけど。

目の前のメイドさんは綺麗な姿勢でお辞儀をする。まるでお手本そのものだ。

「私は王妃付き筆頭侍女のアニエルと申します」

「はあ……」

てつきり王様専用かと思ったけど違うのね。

王妃付き筆頭侍女ってことは、つまり王妃様の一番の側近だってことだよな。

王様はあのライで、王妃様はその妻だから……容姿的にも身分的にもどうみても側室であるはずの私って、もしかして嫌な女じゃない！？

アニエルさんからしたら主である王妃様の憎き相手ってやつじゃ……。

それなのにアニエルさんはニコニコ笑顔で少なくとも悪意はなさそうに見えるけど心の中までは解らない。

これは……なんでもないことを弁明したほうがいいのか！？いや何にもないこともないのか！？

「本当に、記憶がないのですね……」



起きてもない修羅場の予感に焦っていると、はあっと困ったようにアニエルさんは溜め息をついた。

その様子にライから聞いていたみたいだけど、どうやら半信半疑だったのかな。

ていうか普通に自己紹介していたけどアニエルさんは私と顔見知り？

「あの、アニエルさん？」

「アニーとお呼びください。サシャ様はいつもそう呼んでましたから」

フレンドリーな雰囲気についつい私も笑みを返す。

こんな美人さんと仲がよかったのか、私！

美人と知り合えるなんてすごいなー……ってあれ、何か大切なことを見逃しているような……そんな違和感が。

ちよつと待てよ。落ち着いて考え直して、アニーの言葉を頭の中で繰り返す。

……アニーは「王妃付き筆頭侍女」なのに私と仲が良いんだ？あれ、私って側室だよね？ねえ！？

「あの一……」

「はい」

「王妃って……一体どなたのことなんですか？」

まさか、まさかそんなことはあるはずがない。

何度もしつこいようだけど私は平々凡々のどこにでもいるような女だ。

異世界トリップにありがちな特別な力とやらも今のところないみたいだし、自分でもあるようには思えない。

精神的には16歳だからといって夢を見るような性格でもないし。気付いたら24歳になっていたとしてもだ。

あの美形男……ライだってそこまで酔狂なことをするとは……思いたくない。思いたくないけど！

まるで神様仏様に祈るような気持ちでアニの言葉を待った。

待ったのに予想通りというべきか、アニーは輝かしい笑顔で答えてくれる。

「勿論、サシヤ様以外にはいらっしやいません」

……ですよねー！

ついうなだれたくなってしまい、がくりと手と膝が床につく。

所謂絶望ポーズ。アルファベットの『orz』みたいなイメージで、私は力尽きた。

一体何の罠だ、これは……やはりあの美形男ライは自分が美人すぎる故にどちらかというと美人じゃない方が好きなんだ。

これは確定だ。あいつは、自分大好きナルシストが高じて妻は私みたいな平凡な女しか受け付けなかったんだ！

「ちなみに側室もいらっしやらず、ずっとサシヤ様一筋ですわ！」

「……わざわざありがとう」

私の中で、ライのイメージがどんどん悪くなる。美しさ故の過ちなのか分からないけどそれでいいのだろうか。

普通は格好良い王様には美しい王妃様が並んで和やかに微笑みながら手を振ってくれる、国民の目の保養みたいなものであるはずなのに。

そもそもどうして異世界人であるはずの私と、国のトップである王様が結婚することになったのだろう？

そりゃ異世界トリップはありがちだけど、現実的に見れば有り得

ないよね。

ぶつちやけて素性のしれない女を王家に入れていいの？

馴れ初めを聞いてみたいけど、とんでもない真実が出てきそうで聞きたくもないようなもどかしい葛藤。

いやでもここは聞いてみないと何もかもが始まらない！

「ねえ、アニー？」

「はい」

「私はこちらの世界に来たときって知ってる？」

「ええ、知っていますが……お答えできません」

うつん？知ってるのに教えてくれないの？

お答えできませんってことは言いたくない、もしくは口止めされているということか。

一体どんなことをしたんだ、私！？

16歳の私を信じたい……くどいんだけど気分的には今も16歳だけ。

「えーと、じゃあ王様……ライと結婚に至った経緯とかは？」

「それもお答えできません。陛下にお聞きくださいませ」

につこりと有無を言わせない笑顔。

な、なかなかこの人は強者だ！

さすがは王妃付き筆頭侍女のことはあるな！ていうか私専用のメイドさんのはずなのに！？

私の言うことは聞けんのかーい！っというツッコミは、ええ、勿論出来なかつたです……。

「ですがサシャ様が、我がウィートランドの王妃でいらっしゃる事実は紛れもない真実でございます」

「……アニー？」

アニーの表情は微笑んでいるけど、どこか不安げに揺れている。誰かと一緒に表情だと思って……出かける前のライと同じ表情だと気付く。

どうしてそんな顔をするの？もしかして思ったより、これは深刻なことなのだろうか。

そもそも、私はどうして記憶を失ってしまったんだろう。

あと、もう一つ。なによりも大切なこと……どうして私は結婚したのだろうか。

だって結婚って事は私はこちら側で生きていくことを決めたって事だよね？

正直今は16歳の感覚しかないから、不思議にしか思えない。けど。

「……ちよつと色々忘れちゃったから正直嘘みたい」

「サシヤ様……」

「だからいろいろ迷惑かけるけど、よろしくね」

「……はい！」

ちよつとどころか、最初に戻っちゃったんだけどね。

でも24歳である事実は覆らないし何事も楽しまなくては。ようするになるようになれだ！

それに平凡な一般家庭の私には滅多に体験できない生活が味わえるかも。ちよつと期待。

ごめんね、質素儉約家の我が家族たちよ！

と、邪なことをちよつと考えていたらアニーが輝かしいばかりの笑みを浮かべていた。

「さあさあ、サシヤ様！そうとなれば、美しく着飾りましょうね？」

今までのシリアス顔を吹き飛ばすような、高揚したアニーの表情に思わず引き下がる。

目の前には、何やら『ふりふりなピンクドレス』らしきものを持っているアニー。

え、それ着るの？どうみても可愛い系しか似合わないのに、こんな凹凸のない平凡な顔の女に着せると言うの？

それに私って……一応、24歳だよね！？

本能的な何かが逃げる！と言っているが、私に勿論逃げ場はなかった……。

まさか普段から逃げ回っていて、記憶がないことをいいことにあれこれと遊ばれていることなんて。

今の私には知る由もなかったのである……。

私の異世界生活は楽しいばかりではないことに気付き、以前の私に少しでも同情した。

## 2・（後書き）

サシャ（今野さや）

16歳の女子高生のはずだった、現24歳。  
気付いたら王妃様にランクアップ。

アニエル

サシャ王妃付き侍女。

清楚系美人の見た目に反して、色々勢いのある人。  
ちなみに22歳。

お読みいただきましてありがとうございます。  
良かったら感想をよろしくお願い致します。

ふりふりのどピンク可愛い系を着るか、フリルあるけどただちよつと上品ドレス風を着るかの選択で、勿論選択の余地はありませんでした。

……鏡に写った自分を改めてみると、これって痛い人じゃない？確かに十代であれば多少なりとも似合っていたかもしれないけど、どう見ても二十歳を超えている私にはきついものがある……。

アニーは物凄い笑顔なんだけどね。正直アニーのほうが似合うと思うんだ。

それが開き直るしかない。だって信じられないけど、私にとつたら『16歳』の朝でしかないしね！

「サシャ様、それでは遅くなりましたが朝餉の支度が整いましたのでこちらに」

アニーが隣の部屋へと誘導する。

やはり豪華な寝室の先は、豪華な部屋が待っていた。

ここはリビングみたいなどころ？4～5人は余裕で座れそうなソファアが置いてあつて、複雑な織物のような絨毯がひかれています。

壁側には絵画が飾つてあつて、本棚も。おお、使っていないけど暖炉らしきものもあるよ！

まさにお城の中のような……ってお城なんだよね、ここって。

しかもドツキリでない限り、城は城でも王城である。さらにその主の人の妻、なんだよねえ。

そう思うと何だが胃の辺りがキリキリと……と、思ったら「ぐー」と空気を読まずになつた。

……はい、おなががとつても減りました。

「どうぞ、お召し上がりください」

「ありがとうございます……」

うつ、恥ずかしいっ！アニーは暖かく微笑んでいるのが更に居心地悪いの何の！

仕方がないじゃん！昨日は失恋したから、殊勝にも夕飯をぬいちやったのが悪かったんだな。

って本当の『昨日』は知らないけど。

目の前にあるのは極々、いやとても美味しそうな洋食らしきもの。見た目はそう変わらない。白いパンにサラダに、暖かいスープ。

サラダの葉っぱは見たことないのがあるし、スープの色は赤いけど……こんな美味しそうな香りがするから大丈夫だよな？

「い、いただきます」

マナーを知らないけど、とりあえず白いパンをちぎって口に入れる。

……うん、期待を裏切ることなくパンですよ。

でももっちりしていて焼き立てみたいに美味しい！

スープもサラダも、知っている味とはちよつと違うけど、一応『文化が違う』から味付けも違うよね。

それに許容範囲どころか、とても美味しい！

朝からがつつく私を、アニーはにこにここと笑顔のまま見守っていた。

ちよつと見られて食べにくかったけど、完食してお腹も一杯で満足。



「ごちそうさまでした！」

「お口には合いましたか？お茶をどうぞ」

「美味しかったよ！ありがとう」

お茶も紅茶みたいなもので、とっても香りがよくって美味しい。さすがに異世界とはいえ、これが最高級のものだと気付く。

なんとというVIP待遇。本当にいいのかな。

美味しいお茶を一服したところで、これからどうすればいいんだろう。

アニーは急かす様子もなく相変わらずにこにこ笑顔のままだし。まさしくメイドの鏡……と感心ではなくて、なーんか妙な気分だ。例えるならば、都会に出た息子が故郷に帰ってきた時に手厚く迎えるときのような……。

ちなみにこれは我が家の親父殿の実体験らしい……だから毎年帰省していたのか。

「サシヤ様」

「は、はい！」

突然話しかけられて、明後日の方向に行きがちだった思考を戻す。不思議そうなアニーに何とか笑顔を取り繕ったら、追求はやめてくれた。

うん、やっぱりメイドの鏡だ！

「陛下より公務の取りやめについての指示は受けております」

そりゃそうだね、記憶喪失みたいなもんだもん。

極々一般人で100%純粹の庶民である私にそんな高度なことなどできるわけがない。

貧相な頭では、精々民衆を前にして微笑みながら手を降っている

イメージだけでも！

「それともうお一つ……」

と、途端にアニーは晴れやかな笑顔を消し、暗雲立ち込めるかのよう  
に物憂げな顔をした。

清楚で明るいイメージじゃなかったアニーにしては珍しい表情。  
な、なんかあるの！？と私は内心焦る。

「サシヤ様には王妃の再教育として、後見人でいらしゃるクレイ様  
に会っていただきます」

「後見人？」

「はい、クレイ様はウィートランドの古くからの諸侯の一人であ  
り王家にも深くかわりのあるお方です」

へえ、じゃあ偉い人だ。そんな人から王妃教育受けていたのか。  
何となくイメージでは、荘厳な白髭を蓄え厳しい眼差しのジェン  
トルマン。

先が思いやられるな……テーブルマナーなんて勿論知りませんと  
も。

「サシヤ様、何があっても気を遠くなくさないでくださいね……」  
「……はあ？」

苦渋の決断をするかのようにアニーは大げさに顔を顰めた。  
一体に何を、と問う前に閉じられていた扉が突然開かれた！

「おそーい！！！！」

開いたと同時に、開いた本人と思われる人物が怒りを頭に叫ぶ。

あまりのことに驚いたのと同時に、その人物の服装に唖然……。何だこの、目の痛い色は！真っ赤で更にど真っ赤なドレスに頭が傾きそうになるぐらい重そうで派手な真っ白い帽子という奇抜な格好。

ちなみに帽子は羽でアレンジされていて、一瞬鳥の巣をつけているかと思った……。

エメラルドグリーンのハイヒールをこつこつと響かせながら近付いてくるものだから、逃げたくてたまらない！

それに、それにだ。ドレスはどう見ても女性ものだけど、よく見たら女性にしては身長も肩幅があつて……。

先程の扉を開けたときの叫び声は女性の声ではなくて、随分低い男の声だったような……。

「ちよつとお！聞してるの！？」

「……す、すみません」

顔を近くで見るとこれまた美形！私、美形に弱いはずなのに全然嬉しくないよ！

美形なのに、どう見てもカツコイイのにどうしてバッチシ化粧してあるんですか！？

パープルのアイシャドウに赤のルージュ、金色に近い髪の毛は綺麗な縦ロール……違和感あるけど、美形だから似合っていないわけではない不思議……。

くそ、どんな格好をしていても似合うなんて美形ってやっぱり得だ。

「……どうしたの、コレ。本当サシャなの？」

「クレイ様、先程申し上げたとおりサシャ様の記憶は今16歳です」「ほんつとに記憶ないのねえ」

はあ、とため息交じりに物凄く呆れたご様子。

ん？ちよつと待つて。アニーってば今なんて、誰様って言った？  
聞き間違いでなければ、これがあのクレイ様？

私のなかの蔵しそうな紳士のイメージがガラガラと崩壊する音が  
聞こえた。

う、うそだ。こんな奇抜な格好が許されるなんて……。

「まあ、いいわ。記憶がないならしないで、この方が返って調教のし  
がいがあるじゃない？」

「クレイ様、あまりサシヤ様を虐めないでくださいよ！？」

「安心なさい、あたくしが立派な王妃に再教育してあげる」

……間違いない。

この人の性格はSだ！生粋のどSだ！！

扇（これまた原色ピンク）を翻しながら妖艶と微笑む姿がハマリ  
過ぎです。

ハマリすぎだけど、常識的に考えてどうみても女装の変態さんに  
私は気が遠のくなりそうになったのは言うまでもない…。

前途多難な様子にセレブ生活という夢はどうやら早くも崩れてい  
るみたいです。

王妃いらないので、帰って欲しいとはさすがにまだ言えませんでしたと  
も……。

### 3・(後書き)

遅くなつてしまい大変申し訳ございません！  
人物紹介はまた次回にて。

「ちょっと、何コレまずいお茶ねえ」

「そうでしたら召し上がっていただかなくてもよろしいですよ」

「あら、あんたもメイドならもてなす義務があるでしょ？」

「私がお仕えするのはサシヤ様ただお一人ですの」

何故かくつろぐクレイ様と給仕するアニーは顔を合わせて微笑みあう。

表面は美形同士の微笑みあいなのに……う、後ろに蛇とマングースが見える。

窓の外は晴れやかのはずなのに、どうしてかこの部屋吹雪いている様にサムイよ！

所詮凡人の私は、その矛先がコチラに向かないようにじっと黙った。

しかし黙ったのにそうはいかないようだ。

「とりあえずサシヤ、あんたどこまで憶えているの？」

「どこまでって……まったく憶えていません」

憶えている中で、私の『昨日』はあの失恋した日。

正直そのことを考えるとまだ胸の辺りが痛いけど、それどころじゃないから大してどうってことないかな。

それよりも驚きの連続と、ありえない光景続きでそっちのほうがどうにかなってしまいそうだ。

そして最たるものがこの目の前にいる……女装変態貴族。いやほんとに、女装だ。

「そう。前から面白いとは思っていたけどここまでとは思わなかったわ」

はあ、とため息をつくけど呆れているようではないみたい。  
ていうか貴方に一番言われたくないんですけど！と言い返したい  
が後が怖いから言わないでおこう。

それより、前からってことは『以前の私』を知っているのだろうか。

「えーと、クレイ様は私のことを知っているんですか？」

「知っているも何も、あんたの後見人はこのあたくし。それと気持ち悪いから様付けはしなくていいわ」

そういうとわざとらしく寒気がしたように身を震わした。

でも、にやにやしたその表情から面白がっているクセに、と思う。  
うーん、何となく以前の関係が予想できるな。後見人って言った  
し。

以前から意外にもクレイとは遠慮がいらなほど仲が良かったみたいだ。

「じゃあクレイ。どうして私がこっちの世界に」

「あんたの過去の話はしないわよ」

言う前に、先に断られたよ！

またなんで揃いも揃って過去を言いたがらないんだろう。

本当になにかあったのか？若干知るのが不安になってきたよ。

一体私はどういった人だったんだろう……今の『私』はどう振舞  
ったらいいんだろう。

「とりあえず、あんたが今記憶喪失なのは一部の人以外秘密だから

気をつけなさい」

「はい……」

「返事はのばさない！本当に解ってるの？」

どピンクの扇をぴしりと鼻先に突きつける。

いちいちその仕草が似合っているけど、どうみても男……。  
いやでも、もしかしたら男とは限らないんじゃない？……！！？

「あの、クレイは男なんですか？」

「あんたその質問をす・る・な！と何度言ったら覚えるの、この鳥頭！！」

ひ、ひどい言われようだ！

しかも今の記憶の中では初めて聞いたのに！初めてなのにそんなにも目を吊り上げて鬼のように怒ることないのに！

以前からこうやって怒らせていたんだろうな、私。今後、この話題は避けよう……。

「とにかく！なにか他に質問ないの！？」

「え、えーと……そうだ！魔法とかってあるんですか！？」

そうそう、異世界といったらこれでしょ！

こう見ても読書家の私はイギリス発祥の魔法学園物も読破した！  
定番中の定番の魔法要素はあって当たり前だと思うけど、トリック物によってはなかったりするから要注意だ。

さあ、この世界に魔法はあるかな？若干ワクワク気味の私をクレイは変なものを見る目つきをした。

ていうか、さっきからその目しかしてないね。女装しているような人にそんな目をされると傷つくな。



「……あんたって本当に記憶ないの？それなのに同じ質問、2度目ね」

「へ？」

「期待したところで、あんたが思い浮かべているような魔法はないわよ」

そっか、やっぱりないのか。そんな雰囲気はしたけどね。

うーん、残念。折角現実世界じゃありえないことがあるかと思っただのに。

今までの感じから似ているのは中正ヨーロッパ風。でもそれにしてはなんだか文明が発展している感じ。

だって部屋の明かりは蝋燭とか火とか使っくんじゃなくて、どうみても電化製品みたいだもの。

一体どうなっているんだろう？置いているスタンドの照明にはコードはないし……。

「魔法はそりゃ遠い昔にはあったかもしれないと言われているわ。でも今はそんなものは聞いたこともないし見たこともない……ただね」

「ただ？」

「ウィートランドの王族には呪いが使えたという伝承は残っているから、陛下にでももう一回聞きなさい」

ま、まじない？呪いとかそういうの？ていうか陛下って……ライのことか。

確かに見た目だけならライって魔法とか使えそうだけど。でも伝承って事は昔の話だね。

クレイの口振りからすると、今はそうでもないみたいだし。

さっきから疑問は全部ライに投げられているのが正直納得いかないけど。

とりあえず、すつきりしないまま頷いておいた。

「さて、そろそろ本題に入るわよ」

「本題？」

「だから、あんたを再教育するため来たっていつてるでしょ」

そうって指をパチンと鳴らすと、アニーとそのほか2名のメイドさんが現れた！

初めて見る顔のメイドさん2名も美人っていうか、どちらかというところ可愛い感じの子だ。

顔立ちに幼さがあるから、きっと未成年だろうな。

私と同じぐらいの16歳かな？同級生にもこんな可愛い子っていないかったような。まあ今は私は成人しているけどね。

ここの制服なのか、フリルのあるメイド服がヘンに似合っていてコレが『萌え』というものか！

「サシャをドレスに着替えさせて頂戴。立ち振る舞いの特訓をするわ」

「はい、かしこまりました」

「では早速失礼致します」

新たなる世界を垣間見て目の保養にしていたら、突然可愛いメイドさん二人に腕をつかまれた！

両腕にくっつかれて、まるで拘束されているみたい。

いや、もしかして本当にそうだったりして……？

嫌な予感がして冷や汗がつたる。

すると目の前に立ったアニーがものすごい笑顔だ。

「サシャ様、お着替えしましょうね」

……悪夢、再び。

顔の引きつる私に、両腕のメイドさん二人も物凄く興奮した笑顔。私に対して好意的なのは解ったけど、私には味方が居ないと悟った瞬間だった……。

これからの自分の運命に顔を青ざめていると、さらに地獄のような一言。

「あとコルセットもきつく締めておいて」

アニーの後ろではクレイが妖しく笑う。

ていうかこのDS！絶対に楽しんでいるよ、この変態女装貴族！睨みつけるけれど、どこ吹く風か。まったく怯んだ様子もなく。声にならない悲鳴とともに、私はいいように弄ばれましたとさ……。

きつく締め付けられたコルセットは凶器であり、やっぱりの目の前の女装貴族はスパルタのDSだ。

美味しそうな食事も、豪華な部屋も今は地獄そのもの。

私はこいうったことが全く向いていないことを知りました。

淑女の道は遠いようです。

ていうか本当に王妃だったのだろうかというほど、道は遠いのであった……。



#### 4・（後書き）

サシャ

異世界トリップした一応王妃様。

適応能力は作中一番かもしれないほど、ポジティブ。

クレイ

ワイト国の古くからの諸侯であり、サシャ王妃の後見人。

しかしその正体は、DSの女装変態貴族。

どうみても男だが、美形補正で女装が似合っている。

アニー

王妃様命の侍女の鏡。

王妃が着飾るとキャラが少し変わる。

メイドさん二人

王妃付き侍女で、王妃のことを慕っている。

アニーと同じような属性の二人。

可愛い子ちゃん

ライ

ワイト国の王様で、サシャの旦那様。

作中登場回数が少ないけど、執務中です。

次回はきつと登場予定。

お読みいただきまして、ありがとうございます。  
そして遅くなってしまう大変申し訳ございません。  
今回でとりあえず朝は終了です。

次回も是非よろしくお願い致します。

## 夜話 1

初めて出会ったのは中学の入学式だった。

彼とは隣同士で、気が付いたら話が盛り上がって楽しくて。気が付いたら好きになっていた。

それなのに彼は私じゃなくて、ずっと一緒にいた私の親友を選んだ。

……いまでも思い出せる、二人の苦く傷付いた表情。

ふられた私なんかより二人の方が苦しそうで、でも私も笑ってあげることができなくて。

二人から逃げて……そして二人ともなくしてしまった。

……はずだったのに。

綺麗で繊細な細工が施された家具。高く美しい紋様の描かれた天井。絹のように滑らかな手触りのベッド。

一目見ただけで庶民には息の根が止まりそうな価格なのだろうと分かる。

超豪華スイートルームが体験出来るのだとしたら、こんな感じなのだろう。

勿論、朝の部屋と一緒にです。ただいま、ふかふかベッド！

「……生きているか？」

抑揚のない美声に返事をする気力と体力はありません。

あの、変態女装貴族め！淑女になるためと鬼のような特訓をかせられた。

筋肉痛が明日を待たずに訪れて、何をするにも億劫だ。もう指一本うごかしたくありません。

……って、あれ？

「何で居るの！？」

「何でって、俺の寝室だ」

何を今更と、訝しげな表情の美形はライだ。

こうしてみると、やっぱり今日会った中で一番美形だな。

こんな人が、私の旦那様……やはり美的感覚が狂っているか、視力が相当悪いかのどちらかだ。

いやいやそうじゃなくて、俺の寝室ってそうか。王様の寝室だから一番豪華なのか。

「あ、そうなんだ。ごめん」

「って、どこへ行く？」

ベッドから降りようとする私の腕を強引に引き寄せて、またベツトに転がせた。

うお！筋肉痛で痛いんだから触らないでよ！！

若干涙目で、顔を上げる。

「だってここでライが寝るなら、私はあっちへ……」

「お前の寝室なんだから行く必要もないだろう？」

へ？私の寝室でもあるの？と思ったけど、そういえば夫婦なんだからそうか。

いやでも、記憶ないんだし、ちょっと一緒に寝るのはどうなんだ



ろ……？

ちらつと見ると、ライは自然に私を抱き寄せるように寝転がる。顔なんてもう数センチですかって距離。美形は好きだけど、この距離は危険だ！

「ち、近いって！こんなに広いベットなんだから近くで寝る必要ないでしょ！」

「今更だ……我慢しろ」

ええええ！本当にこうやって寝ていたのだろうか？

だってこんなにも美形なんだから、他にも行くところあるでしょ。でもアニーは側室いないって言ってたっけ。うん、勿体無い。

美女のハーレムだって作れるのに、どうして作らないんだ。

「何を考えている？」

「え、えっと……私がこっちに来たときのことを教えてもらいたくなーって」

本当は違うけど、こっちも知りたいことだし！

ライは一瞬眉を寄せて、何かを考えている素振りを見せた。

何、その表情？もしかして……何か隠している？

「わかった。但し一晩に一つだけ答えることにする」

「え！どうして？」

「お前のことだ、何でもかんでも考え込んで眠れなくなるだろう？」  
「うーん……」

こうみえても探究心旺盛な私なら一晩徹夜してもおかしくはないけどたしかに連日寝不足になりそう。

やっぱり夫婦だからか、私のことよく解っているな……。

でも本当は何よりその紫の色の目が心配そうに不安そうに見えたから、ここは頷いておこう。

朝も思ってたけど、その目に弱いんだよね。記憶ないのに変な感じだ。

「わかった……じゃあ、私がこの世界に来た日のこと教えて」

「……その日は、城で夜会が開かれる日だった。考え事していた俺の上にお前が降って来た」

降って来た？ そんな雨みたいなものじゃあるまいし、と思っていたらライは真剣そのもの。

え、本当にライの上に降って来たの？ 物理的に？

私の疑問に答えるかのように、ライは呆れたようにふつと笑う。

「新手の刺客かと思ったが本当に何もなかったところから降って来たかな。とりあえず異世界人だということはわかった」

「何もないところ？ それってどこなの？」

ある日道を歩いていたら降ってきたとでも言うのだろうか。  
素直な疑問をぶつけると、ライは微かに意地悪く笑った。

「一日一問と言っただろう？ さあ、もう寝ろ」

そういつてぐいつと更に引き寄せられて、気が付けば腕の中同然。  
近いつて！ 近すぎるよ！

まだ彼氏彼女の付き合い経験が0の私には刺激強すぎるよ！

「ちょ、ちよつと、離れてよ！」

「何でだ。黙って目を閉じたら直ぐに寝るくせに」

むむつものすごい寝つきのいい人見たいに言うな！

こんなに近いと心臓がバクバク言っていて寝れるわけないでしょ。  
とりあえず目を閉じる。

すると柔らかくベッドが疲れた身体を包み込んだ。

そういえば、かなりきつかったんだっけ。明日も続くとなると正直悪夢しか見なさそうだ。

見るとしたらド派手な色の悪夢……どう考えてもクレイのせいだ。  
でも、傍にいる人の温かさもあって、どんどん眠りの世界に引き込まれていくような……。

……あえなく、撃沈。

「……………さや」

夢におちるまえに、誰かが囁くように私の名前を呼んだような気がした。

## 夜話1（後書き）

次回はちょっと間があきそうです。  
申し訳ございませんが、お待ちいただけると幸いです。

果たして、人は音を立てず口を開けず食事ができるのだろうか。さらに、蝶々が舞うように優雅かつ淑やかに歩けるのだろうか。答えはわからないけど、私には無理。

だって、普通の高校生だったんだから。

……なぜ、だったと過去形か不思議かもしれない。  
その経緯は残念ながら、今の私も分からない。嘘みたいな話だけど、朝起きたら8年後。

しかもそれどころか、ここは私の知っている日本ではなくて……。

気が付いたらファンタジーでした！

ちなみにファンタジーと読んで、異世界とかく。

ああ、大丈夫、ちゃんと起きてるから。寝ぼけてませんから。

「……ここどこよ」

そんな私は絶賛迷子中です！

……て、そろそろそんな冗談は置いておいて辺りを見回す。

しかし、どこまで行っても樹木、花壇、樹木、時々ベンチ。

まさか庭で迷子になるなんてそんな馬鹿な……とお思いの方、甘い！

一度だけ二階の窓からみた庭園はシンメトリーで綺麗だと思ったけど、実際歩いてみると同じような風景が続いている。

ここだけの話、方向感覚が狂っていると自他共に認められているほどの方向音痴なんだよね。

そんな私がそもそも探検なんて無理な話だったのだ。  
まさか、ないとは思っけど。

このままずっと迷い続けることはないよね……。  
本当に何度目か解らないため息をついた。

どうしてこういった事態になったかは、約一時間半前に遡る。

依然として16歳の意識のまま、異世界生活一週間目。

私はついに脱走してしまった。

『脱走』は言い過ぎかもしれないけど……まあ、ちょっと黙って  
出てきてしまったのは本当。

朝昼晩近くまで一週間ひたすら、あのドSの女装変態貴族にしご  
かれた結果かもしれない。

「蝶の様に舞い、花のように艶やか、ってどんな状態やねーん！！  
」

はあはあ、と大声で絶叫したところで誰も驚く人はいないが、虚  
しいぐらいに声は木霊している。

似非関西弁に驚いたのか、鳥達が多少羽ばたいたような音はした。  
でもお陰ですつきりしたよ。やっぱり不満をためるとストレス  
で死んじゃうって。

そこで冷静になって辺りを見回して思った。もしかしてこれは本  
格的にヤバいんじゃないの？

王妃様が自分の家（城）で迷子になって、そのまま餓死してしま  
いましたとか……。

考えただけでも、ぞっとするというか……。

「そんな死に方嫌だ……」

末代までの恥だ！

きつと教科書やら歴史書やらにのって、歴代一のマヌケ王妃として語り継がれていく。

そんな未来が少しだけ垣間見えて、頭を抱えた。

何だってこんな目にあってるんだ！

これも絶対あのだS女装変態貴族のせいだ！

まあ、確かにちょっと素質がなかった私にも落ち度はあるけどさ……。

……うん、ライに言ってみようかな。王妃様の素質はありませんって。

だってどう考えても可笑しい。あんな美形がわざわざ得体の知れない異世界の平凡女を王妃にするなんて。

「……あれ？」

微かに、声が聞こえる？

風に乗ってだけど、人の声……というか、なっているような声？

まさか王城の庭なんだから獣とかはいないよね……。

抗え切れない好奇心に負けて、声のするほうへ足を進める。

ちよつと広場みたいに整えられていて、その中心に設置されているベンチに声の主はいた。

小さい……子ども？5〜6歳ぐらいかな？うずくまって泣いているようだ。

「どうしたの？大丈夫？」

どうしてこんなところにいる疑問の前に、心配になって声をかける。

こんな小さい子が泣いてるんだもん、声をかけないほうがおかしいって。

声をかけて私の気配に気付いたのか、泣いていた子が顔を上げる。

その瞬間、私は天使にあった。

そう錯覚するほど、天使のように愛らしく可愛い男の子だ！  
艶やかな黒髪に、泣いていて真っ赤な頬つぺた。

ふさふさの睫に涙の雫が乗っていて、きらきら輝いている。

きっと世界中の人々を感動の渦にした、某有名な犬の主人の少年  
の死に際に迎えに来た天使はこんな子だ！

まあ、天使は金髪がセオリーだけど、そんなのは関係ないね。

ああ、私の内なる秘密の扉が開かれそうだ。というか既に開かれ  
ている、頬つぺたすりすりしたいー！！

「……かあさま！」

鼻息荒く挙動不審に現れた私に怯えられると思ったけど、予想に  
反して天使は私の胸に飛び込んできた。

その愛らしい行動に、思わず腕を広げて受け止める。

かーわーいーいー！！ぎゅうつと抱きしめて、私のことを「かあ  
さま」だって！

あれ……………か、あさま……………？

「だ、大丈夫？お母さんとはぐれちゃったの？」

「かあさま！」

……………うん、間違えてるだけだね。だって迷子になって心細いだ  
ろっし。

ありえないありえない、こんな天使のお母さんなんて。一瞬どき  
つとしちゃったよ。



ふう、落ち着け。心の中で一呼吸をしてから、この天使の頭をゆつくりと撫でた。

「落ち着いて、大丈夫だから」

「うん……」

「それでどうしてここにいるの？」

「かあさまにあいにきました…… かあさまがビョーキになったって……」

つまり話によると病床の母に会いにきたのね。

くう、なんか感動の話の予感が！

私こういう話には弱いんだよね、母をたずねて系とか。

あ、思い出ただけで涙がでそうになるよ。

「でもよかったです！ かあさまにあえてうれしい！」

「よかったねー…… ってあれ？」

かあさまに、あえて？ 会えたんだよね？ いつ会ったの？

それに先程から、嬉しさが溢れんばかりの笑顔をコチラに向けてくる。

そのキラキラ笑顔に悩殺され気味だけど、しっかりしろ私！

まさか、まさかだ。あれ、最近このパターン多くない？

とりあえず事実を確かめるためにも誰か事情を知ってる人プリーズ！

「あの、出口ってわかる？」

「こっちです！」

天使にぐいっと手を引かれながら進む。

しっかりした足取りにこの庭園を知っているのがわかる。

にこにこと笑顔を向けられるたびに撫で撫でしたいのぐつと堪えた。

見た感じの身なりは正直お坊ちゃまって感じた。うん、どうみても王子様っていうか……。

いやもしかしたら予想が外れるかもしれないし、物理的に私からこんな可愛い子が生まれるはずがない！

「ユーリウス様！……と、サシヤ様！？」

建物が見えて迎えてくれた可愛らしいメイドさんは天使もといユーリウス様に安堵し、隣に居る私に驚いていた。

え、ええー、その後ろには鎧兜みたいなのをかぶった人も大勢居るし、なんか……大変なことになってる？

メイドさんは発見の報告を叫んでから、私たちを建物の中に誘導してくれた。

洒落にならなそうな事態に顔を蒼くしていると、ユーリウス様は不安そうに見上げてくる。

だ、大丈夫だよー多分……。

「サシヤー！！」

その中で、一番通る声で私を呼ぶ声がした。

この声は……まさか、まだこんな昼間だし……。

そろりと声のほうを見ると、やはり執務中だったのかきちんとした格好のライがいた。

こうやってみると本当に王様なんだな……威厳があって神々しい感じ？

わらわら集まっていた兵士さんやらメイドさんが端っこに急いで寄ってライに道を作る。

な、なんか逃げ場なくしたかも……！

「無事だったか……しかし、なぜ黙って姿を消した？」

ううー怒ってる、ちょう怒ってるよ！

ものすごい美形が怒ったら、ちょう怖いって！心なしか気温が下がっているような……。

そして怒っているライは私の隣に居るほうへ目を向けた。

「それに、なぜユーリウスがここに？」

「だって、とうさま！」

「サシヤの面会は許さないといったはずだ」

ぴしゃりとしたライの言葉に、天使はまた目に涙をためる。

こんなに可愛いのにライってば厳しすぎでしょ！……って、とうさま？

「あのー、ライ？もしかしてユーリウス様はライの子ども？」

……マヌケな質問だっていうのは解っている。

でも冒頭でも説明したように私の記憶は16歳なんだって！

確信めいた予感しかないよ、もう！

「……かあさま？」

「ああ、そうだ……そしてお前の子でもある」

ユーリウス様は不思議そうに私とライの顔を見回す。

天使のように愛らしい外見はライ譲りだと考えれば納得がいく。

まん丸と大きい瞳の色は紫色……そして髪の色は黒色。

ああ、誰か、この際ドッキリ企画だといって……。

とりあえず疲れからか、新たに判明した事実のダメージが大きい

からか、私の意識は言葉どおり遠くなった。

地球の家族の皆様。

どうやら私、結婚して子どももいたみたいです。

## 5・（後書き）

更新が長らく開いてしまい大変申し訳ございません。

そして展開が急すぎて申し訳ございません。

不定期になってしまいますが、お付き合い頂けますと嬉しいです。  
人物紹介はまた次回に行いたいと思います。

「…………わああああ！！！」

がばつと起きると、傍に控えていたアニーがびっくりしていた。心配そうな表情で、こちらに近付いてくる。

あれ？私どうしたんだっけ？

ふと、ソファアーベツトみたいなもので寝ていたのに気付く。

しかし形はソファアーみたいだけど、大の字になっても余るぐらいなんて。

もうこれ、簡易ベツトでしょって、そうじゃなくて。

「サシャ様、どうされましたか！？」

「な、なんか、不思議な夢見てさ」

そう！そうだよ、子どもがいたなんてそんな冗談……ないよね？確かに天使だった。艶やかな黒髪に、すみれ色のくりつとした大きな瞳。

ほっぺたはマシユマロみたいにふにふにしてそうだし、笑顔は天に召されるほど可愛かった！！

ああ、もっとちゃんと抱きしめておけばよかった……。

でも夢にしては具体的で、こうなんていうか……リアリティがあったていうか。

あれ？

「…………あのさ、黒髪に天使みたいな見た目のユーリウス様って知っ

てる？」

「え、ええ。サシャ様、記憶がお戻りに!？」

「いやいや、全然」

まったく、これっぽっちも。

首を激しく振っていると、アーニは残念そうな表情をした。

……つまりユーリウス様は実在する人物で、何か関わりのある子だってことだね？

き、聞くのが怖い!!でも知りたいような……もどかしい。

「……なんだ、元気そうじゃない」

隣室に続く開けっ放しの扉から、真っ赤な塊が顔を出した。

とまさしく言いたくなるような格好だ。

頭には大きな薔薇のコサージュで纏めてあって、真紅のベルベツト地の波打つドレス……。

もちろん変態女装貴族のクレイです。

「まったく、ほんっとお騒がせ王妃ねえ。勝手に脱走しておいて、意識失うなんて」

「……うう」

「ユーリウス様にもお会いしたっていうし?陛下まで出て来ちゃったから、皆大慌てよ」

クレイはため息をついて、心底うんざりとした表情をした。

でも呆れているのと同時に、愉快そうな色もちらほら……くそう、人事だと思いやがって!

と、そういえば天使、もといユーリウス様はどうしたんだろう……。

あと最後に居たはずのライもない?

「そ、そのユーリウス様とライは？」

「……おかわいそうだけど、ユーリウス様はお部屋でお勉強。恐らく陛下なら、もう直ぐ来るわよ」

「やっぱり、ライって怒ってる？」

癪だけど恐る恐る伺うように聞くと、クレイは真っ赤な口紅に彩られた口の端を引き上げる。

まさに「覚悟しておきなさい」と言わんばかりの表情で……。  
ひいっ！逃げ出したい！！

しかし、クレイとアニーに見張られている状況ではどうやっても無理だ。

いっそのこと、意識を手放してしまいたい……。

「……起きたのか」

そうこうしている内に、部屋に美声が響く。

よく通る声だからすぐに解った……淡々と落ち着いているようだけど、やっぱり怒ってます？

ぎぎぎ、と擬音が付きそうに首をゆっくり向けると、最後に見たときよりはくつろいだ格好をしていた。

例えるなら、スーツ姿でもネクタイと背広は脱いだよみたいなの？

こつちの世界の男性の礼服用たことないから解らないけどさ。

ら、ライ様、国王様としての執務はよろしいのでしょうか？

「陛下、公務の方はよろしいのですか？」

「良い、あとはあいつらで何とかなる。それよりクレイ」

「……はい」

「この度の責任、どうやって取るつもりだ？」



あ、あああの！傍若無人が形になったようなクレイが頭を下げて  
いるよ！！

しかもいつもより緊張しているみたいだし……まあ、私も絶対零  
度のオーラが出ているライを直視できていないけどね！

こうしているとやっぱりライは偉い人だ……部屋に緊迫した空  
気が流れる。

もしかしくなくてもクレイは責任をとって、何らかの罰を受けなく  
ちゃいけないのだろう。私のせいで。

……ちよつと待って！

「元はと言えば私が勝手に抜け出したのが悪いんだし……クレイに  
責任はないよ！」

まあ、それもクレイの地獄の特訓が原因だけだね！

ライはクレイからこちらに、ゆっくりと視線を向けた。

視線がぶつかって揺れる紫色に、同じ瞳のあの子を思い出す……

あの子、ユーリウス様は泣いてないかな。

きつと、最初出会ったときのように泣いている。

あの子に会いたいけど……まずはライに心配かけたんだしちゃん  
と謝らなきゃ。

「……ライ、ごめんなさい」

「……まったく、この最近はお前に振り回されてばかりだな」

ふーっと疲れたようにため息をつく。

うん、心配ばかりかけてごめん。

ライだって王様なんだから色々大変だろうに、肝心の王妃がこれ  
じゃね……。

本当どうして結婚しようと思ったのか、謎だよね。

頭を悩ませていると、ライは言葉を続けていた。それはもうつい

での何かのように。

「なら、サシヤ。皆を振り回した罰に、来月の公務を言い渡す」

「へ？」

「隣国の来賓を交えての晩餐会だ。きつちり、礼儀作法を学べ」

れ、礼儀作法……？今までクレイから学んでいたこと、だよな？  
え？ばんさんかい？晩餐会って、みなでお食事すること？  
それともロマンス映画にありがちなダンスパーティーみたいなこと？

隣国との晩餐会！！？どーしてそんな展開に！？

「サシヤに晩餐会を承諾できてよかったですわね、陛下」

「クレイ、くれぐれも逃げ出すような特訓はやめろ」

「ええ、サシヤの努力次第で善処いたします」

先程と、この変わりよう……。

やれやれといった態のライと愉快そうに微笑むクレイの二人に……  
間違いないと嵌められた？

茫然としている私にこっそりとアニーが教えてくれた。

「サシヤ様の晩餐会嫌いは前からのことなので……」

そーゆうことかい！

目の前の二人組を一発ずつ殴りたい……。

一応お貴族様と国王様だから、だめか……。

ぐつと、拳を押さえた。うん、私ってば大人！

「サシヤ、これは罰だからな。ちゃんと約束を守れよ」

「……じゃあ、ユーリウス様に会わせて！」

どう考えても要求できる立場じゃないけどさ！

とりあえずあの子に会いたい……そう言つと、からかう様なライの表情は真剣になった。

クレイとアニーまでそれにつられる。というか、心配そうな表情？皆の様子が一瞬で変わった中、やや険しい顔でライは問う。

「……ユーリウスのことは思い出したのか？」

「うん。でも泣いていたから……それに事実が知りたい」

もうこれ以上驚くこともないはずだ。

だって最初からいきなり8年後だって言われてるし、結婚もしているし。

その可能性については容量一杯で、今まで思いつかなかったけど

……ありえるよね。

「ユーリウスは紛れもなく、俺と……お前の子だ」

ですよねー！！

ただ、ただね、私のDNAがどこにも見当たらないけど。

ああ、あるとすれば唯一黒髪ぐらい？

それでも、容姿は目の前のライをミニマムにして可愛さだけを強調した姿……。

平々凡々の私と本当に血が繋がっているんですか？

「ユーリとお前は呼んでいた」

「ユーリ……」

ユーリ……ユーリウス、って呼ぶよりもしくりくる。

そういえば、ユーリウス様って呼んだら驚いたような表情をして

いた。

「記憶のないお前が、ユーリウスに会って何ができる？」

真直なライの言葉に、胸がつかれる。

記憶のない私に……なにができる？

……そうだ、だって王妃だって言う自覚もないのに。

言葉が出ずに、私はただ、ライを見つめるしかできない。

「それが解らないお前に……ユーリウスを会わせることはできない」

それでも、あの子は泣いているような気がするの。

どうしてか、心の奥底からそう叫んでいた。

それなのに、私は言葉がでなかった。

## 6・（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。  
変に続いてしまい申し訳ございません。

できれば、今月中にも更新したいと思います……。  
遠くなるかもしれませんがよろしければお付き合いください。

「……サシャ！」

あ、と思つて勢いよく顔を上げる。

すぐ目の前の、厳しい顔をしたクレイに驚いて飛びのいてしまつた……。

いや、キツイって……そりゃ一般的に整っているけど、ばつちしメイクした女装顔が間近なんて恐ろしいよ！

今日の夢に出そうだ、いや確実に出る！井戸から出てくるあの人のみたいに……！

ちなみあの映画みてから、暫くはビデオ再生が怖かったのを思い出した。

「あんた、絶対失礼なことを考えているでしょ！」

「いや……そんなことないよ？」

おかしいな、何でバレたんだ？

全く以つて反省はしていないけど、一応小さく謝っておこう。

このドSを怒らせるとマズイのは身を以つて知っているし。

「ごめんって」

「誠意の欠片もない謝罪ね……それより聞いていたわけ？」

「えーっと……たしか晩餐会の開催目的だっけ？」

「そうよ、我が国が主催とはいえ要するに隣国との和平調停記念よ」

えーと、ここウィートランドは、近隣ではまあ大きい国ではあるんだよね。

農作物から鉱石発掘や貿易商などが盛んで、商業都市が有名っていうのはちょこつと学んだ気がする。

で、お隣のバ、バードランドだっけ？鳥王国みたいな名前だったような……。

歴史が苦手だと言うことを忘れていたというか、こっちまで勉強しなくてはいけなくなるなんて思いもよらなかったよ。

「隣国ヴァードランドは織物が有名ね。その技法について戦が起こったほどよ」

「うーん、鳥みたいな名前……そういえばウィートランドと名前が似ているね」

「そりゃ元は同じ国が分裂したんですもの。だからこそ仲が悪かったのよね」

「仲が悪いの？」

「昔の話……とも言えなくもなってきたけど」

クレイが眉を寄せて、私の顔をまじまじと眺めた。睨んでいると言うより、値踏みされているような？

一体何なんだ？それに結局仲悪いの？

疑問に思っているうちに、クレイは一つため息をついた。

それはもう、疲れたように。何だか解らないけど、絶対失礼なことを考えているでしょ！

「……まあ、ユーリ様もいらっしゃるだろうし軽率な真似がしないとは思っけど」

「ユーリ？どうかしたの？」

「こっちの話よ。いいからアンタはテーブルマナーをしっかりと頭に叩き込みなさい」

目の前には、何も乗っていない白い皿とフォークやナイフやらずらりと並んでいる。

うう、一般家庭に育った私にとって、食事なんて箸一膳で充分だよ！

大体、ちよつと違うからってその都度フォークやナイフを変えるなんてエコじゃないよ！

それに比べたら、日本は箸一膳で何だって食べちゃうんだから経済的だね！

さすがエコ大国日本！

エコポイントが終わったのは残念だけど、ちゃっかり者の母上は抜け目なくエコポイントを使っていたよ……。

でも、母といえはどうしても思い出す。『かあさま』に会いにきたというあの子のことを。

「また、違うこと考えてるわね？」

ぎく！

と、ワザとらしくビクついて、クレイの制裁を待つけどやってこない。

ちらりと恐る恐る見ると怒っておらず、真剣な表情をしていた。

「……陛下に言われたこと、まだ気にしてるのね」

「……うん」

あのあと、何か急用が出来たライは行ってしまった。

私は何も答えられないまま、黙って見送るしか出来なかった。

だって……だって、私は16年の記憶しかなくて。

結婚でさえ、ようやく法律上できる歳になったばかりなのに、子どもがいましたなんて。



でも同時に黙っていたことにもやややる。どうしてこんな大切なことを黙っていたんだろう。

「そりゃ陛下だってアンタにいつまでも黙っては居られないとは考えていたわよ」

私の考えを見抜いたのか、クレイが私の頭をぼんつと叩く。それは全然痛くなくて……どちらかというと励まして感じ。

「でも」

「アンタが拒絶したらユーリ様はどうすればいいの？」

被せてきたクレイにでかけた反論が口の中で萎む。

泣いていた、ユーリ。きつと『かあさま』が大好きなんだ。

ライも、ユーリのこと大切でああいう風に言ったのは解った。

……じゃあ、私は何ができるの？

「拒絶しなんてしない！」

そんなのはシンプルだ。

頑張っても残念な頭を捻って考えてもできることなんてわからないに決まっている。

高だか、16歳の小娘になにができる？まあ、今は24歳だけだね。

それに、天使と見間違えうほどの愛くるしい子が私の子だと！？なんて、ラッキーなんだ！基本無宗教だけど、神様ありがとう！

「アンタねえ……本当に解ってるわけ？」

「解らないよ！でもユーリが泣いているのは嫌。母親として振舞えないかもしれないけどあの子が望んでいるなら会いたい」

お父さんだって、お母さんだって、兄や弟だって。

普段は口も悪いし、扱いだってぞんざいだし、私は橋の下で拾われたのねネタはとりあえず兄弟分だけやった。

それでも、何も言わずに寂しいときは一緒に居てくれた。

……会えるなら、会いたい。

「……陛下をどうやって納得させるつもり？」

クレイは呆れたように、額に手を当てていた。

こういったとき、クレイは味方で居てくれるとどこか知っている。これは、きっと私がどこかに置いている『私の記憶』。

解らないけど、そうだと思う。

「なんにもしないよ」

「はあ？」

「大体ライは横暴すぎる！」

一気にもやもやが、むかむかになる。

最初から思い返せば、そうだった。横暴だ、あのイケメンは！  
くやしいぐらいにイケメンだし、優雅で気品溢れているけどさ！

「だからさ、クレイ」

「え？」

につこり笑うと、クレイは後ろにたじろいだ。

DS女装貴族のクレイにしては珍しい行動。

うふふ、気持ち悪い笑いだけど、今ならなあんにも怖くない。  
それほどに私の怒りは深いのだ。

偉そうなライ、って王様だから当たり前だけど。

何でもかんでも思い通りになると思うなよ、その美形の顔を明かしてやる！

「協力してくれるよね？」

「……何するつもりよ」

諦めた様子のクレイに、私の笑みは益々深まる。

私の『したいこと』を話すと、クレイは一瞬だけ目を見開き、深々とため息をついた。

「ほんと、あんた達夫婦の喧嘩はろくでもないわね」

喧嘩じゃないけどね。

これは一方的に、だけどささやかに反逆する話なだけ。

## 7・（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。  
思ったより続きます……。

今月中に2章は完結したいです。  
次回もよろしく願います。

ちょっと前に一世を風靡したメイド服は、今となつては定番だ。定番つて言つても実際に着ている人が居れば二度見はしてしまうけど。

学園祭でも定番設定のそれを可愛い子がきていたら目の保養……もとい、可愛いから和む。

だけど、ぶっちゃけ若さで何とかなるようなものだよね。今着ている服を見下ろして、ため息がつきたくなった。

なぜなら、問題のメイド服を着ているからだ。

はい、その年齢のことは言わないー………そういうのは本人が一番わかっているから。

でもメイド服っていつでも、見た目重視の可愛いやつではない。王城で一般的に着ている仕事着なのだ、これは。

ふんわり膝下のスカートは、ふんわりしているから余裕があつて早歩きに最適！

しかも下にかばちゃパンツみたいなのを履いているから、スカートが捲れても無問題。

フリルのついたエプロンも、びっくりするほどポケットが付いていて某未来型ロボットも更に真っ青だ。

どうりで、アニーが櫛やら鏡やら化粧道具やらを何にもないから取り出すよ！

うーん……この機能性重視の制服は誰が考案したのだろうか。おっと、そろそろ萌と効率の共存はおいといて。

「えっと、三つ目の角を曲がるんだっけ」

クレイから渡された地図を見る。

といつても方向音痴の私を知っているのか、クレイは丁寧かつ慎重に根気よく教えてくれた。

……まあ、途中から指示書になってるけどね。このとおりに行けば着くと最後のほうは諦めがちに。

うん、なんか致命的な方向音痴でごめんよ。

「……このつきあたりつと」

あの子、ユーリに会いに行く。

クレイは面白そうに笑って、当然のようにアニーは反対した。ライから部屋から出すなと言われていたらしい。

どうしても会いたかったからお願いすると、アニーは渋々頷いてくれた。

メイド服と目立つらしい黒髪を隠すためのカツラを持ってきてくれたのはアニー。

直前までは一緒に行くと言っていたけど、クレイがそれを止めた。どうやらアニーは、王妃つきのメイドとして城では有名ならしい。

『そんな目立つアニーと一緒にいるところを目撃されて、つかり陛下に報告されたらどうなるかしら』

と、クレイの鶴の一言で、泣く泣く諦めた。

しかし説得された相手がクレイなのが大変不本意なのか、二人とも微笑み合っているのに背景にブリザードが見えるよ！

こんな古典的漫画表現を実際に見られるとは……。

うーん、戻るのが怖い。けど、クレイには必ず戻ることを約束の上の協力だからそれはできないけど。

「ここか……」

重厚そうな扉をゆっくり開く。

クレイの言っていたとおり一間の受付みたいな部屋があって、その前に二人が奥に続く扉をはさむ様に立っている。

鎧はつけていないけど、剣は持っているから兵士だね。

そのうちの片方を目が合った。

「何か御用ですか？」

「ええっと、王妃様からユーリウス様宛てに手紙を預かってまいりました」

メイド服に茶髪のカツラのおかげか、どうやら気づいていない様子だ。

持ってきた手紙を出すと、もう一人とアイコンタクトとった。

なんか、こうしてみると兵士というよりは騎士って感じた。

よくよくみれば、爽やかイケメンって感じだし、この城美形率高え！

「ではお預かり致します」

「い、いえ！王妃様から、言付けも頂いてますので！」

するとちよつと困ったような表情。

もう一人の体育系イケメンとまたまたアイコンタクト。

「陛下からはしばらく誰も通すなど……印は確かに王妃様のものですね」

「床に臥せっている王妃様からどうしても伝えてほしいと言われてるんです！」

わざとらしく顔を伏せて泣く真似。ちょっと大げさかな？

でも兵士さんたちには効いているのか、あせった様子を見せだした。

実は私つまり王妃って、ほかの人には病氣ということになっていくらしい。

だから子供であるユーリに会えないのも公の場に出ないというのも、それが原因ということになっている。

お庭で遭遇しちゃったとき、気を失って倒れちゃったから更に信憑性がまじたらしいし。

「……わかりました、どうぞ」

なにやら小声で話し合ったかと思うと、奥に続く扉をゆっくり開いてくれる。

とりあえず頭をぺこりと下げて、扉の中へ入っていった。  
うつん、なんか胸が痛むなあ……困惑した表情の中に、心配そうな表情も見えたから。

臥せていることになっているのは、私が記憶がないから。  
でも本当に覚えてないんだよね、懐かしいという感覚もないから毎日が新鮮な感じ。

「……失礼しまーす」

一通り見たけど中には誰もいないみたい。

二階に位置しているこの部屋に入ってすぐに大きな窓が目に入る。

まだ日は高いけど薄いレースで覆われているからそんなに眩しくはない。

部屋を見渡すと、子供向けの内装だけどやはり豪華だ。シンプルなライの寝室より華やかな印象を受ける。



あれ、ユーリいないよ？

「ユーリ殿下ー？」

あまり大声出すと部屋の前の兵士さんが飛んで来そうだからやや押さえ気味に。

扉のない寝室を覗いてみると、そこも無人だ。

おかしい……ここは二階だし、窓の下には他の兵士さんが見張っている。

この部屋に居るはずだけど……かくれんぼ？

だとすると、どこに？

ユーリは小さいから家具の上には隠れられないし、となると下だよね。

食卓で使われそうなぐらい大きい机を見て、棚の一番下を開いてみる。

いないとなると……ベッドの下かな？

「ユーリ？」

暗いけど、小さな影が見えた。

小さく丸まって、声をかけてもぴくりともしない。

え、ちょ、大丈夫だよね？

焦りつつ引つ張ると、ユーリの瞼は閉じられていて呼吸も規則正しい。

……寝ちゃってる？

ゆっくりとベッドの上に寝かせて、顔にかかった黒髪を横に撫でる。

やっぱり天使のような寝顔だなあ。もうずっとなでなでしたいくらいに可愛い！

子タレだったら今頃大活躍だよ、CM引つ張りだこ。

まあ、ここには子タレもCMなんてものもないだろうけど。  
その天使のような寝顔に涙の後がある。  
泣いていたのかな……。

「……だれ？」

ゆっくりと瞼が開いたかと思うと、眠そくに目を擦る。  
可愛いつじやなくて、お目覚めだ。  
薄暗いし、カツラをつけているせいかわからないか。

「私だよ、ユーリ」

「……かあさま？」

大きなすみれ色の目を、更に大きくして見つめている。  
まるでお化けを見たような反応だけど……そりゃそうか。

「どうして……かあさま、おぼえてないって」

「……ユーリ」

やっぱり、ライは話していたみたいだ。

ユーリの顔が不安そうな表情。

まだこんなにも小さい子供なのに……私のせいだよね。

私だって、お母さんにある日突然忘れられたら、寂しいし悲しい。  
それなのに、ユーリは物分りの良いふりをして我慢している。

「あのね、ユーリ」

「かあさま？」

そっと、ユーリに触れる。

正直、ユーリを見ても記憶は少しも蘇らなかった。  
未だに本当に私の子か、と半信半疑ではあるけれど……。

「それでもユーリと仲良くしたいと思うの。ユーリに笑ってほしい」

勝手かもしれない。

でも、ユーリには笑っていてほしいって思う。

それはもしかしたら、忘れてしまった私の心なのかもしれない。

「かあさま！」

ユーリが抱きついて、大声で泣いた。

庭では声を押し殺すように泣いていたのに、今は小さい子供のように泣いている。

ようやく年相応の姿に、なんだか胸が温かい気分だ。

可愛いの最上級の言葉でも表せないようなこの気持ちは……愛しいとか？

ゆつくりと、さらさらの髪を撫でる。やっぱり触り心地は最高だ。そうしていると落ち着いてきたのか、抱きついたままユーリは顔を上げた。

「でもどうやってここに？」

……そういえば、メイド服なんだった。

茶髪のカツラも不思議そうに見ている。

まさか、お忍びできていますなんて、ユーリに言えないし……。

そもそもライにバレたら、ヤバイよね。

まあ、ライの言うとおりにしていたら何時までもユーリに会えなかったからいいけど。

でもばれていない内に戻ったほうがいいよね、アニーとクレイに

も迷惑が掛かるし。

「サシャ!!」

なんて考えていると、寝室の入り口から怒声が……。

思っていたとおり、厳しい顔をしたライがいた。

美形なだけあって、その眼光は絶対零度の冷たさを持っている。

心なしか、部屋の温度も下がって寒いような……。

不安そうなユーリを抱きながら、私は乾いた笑いしか返せなかった。

## 8・（後書き）

続きが遅くなってしまい大変申し訳ございません！  
そしてまだ引っ張ります。  
次もよかったですらよろしく願います。

ふわっふわの絨毯はおそらく幼いユーリのための配慮だろう。  
この絨毯のすわり心地は最高で、きつと転んでも怪我しない。  
手触りもさらさらで、お昼寝にもばっちこいですね！

……まあ、こんな状況でなければお昼寝の一つや二つはできたかもしれないだろう。

その高級絨毯の上で、私は正座させられている。

目の前には仁王像もびっくりの王様……怒っているライ様だ。

しかし、ライはどうして正座を知っているのだろうか？ジャパニ  
ーズ文化なのに！

「……サシャ？」

「う……」

余計なことを考えていたのがバレたのか、ずっと眼光が鋭くなる。  
わあ、怖くて顔が上げられないよ！

ちらりと見えたライの背後にいる兵士さんたちも顔面蒼白だし。

うんうん、やっぱり怖いよね。

ちなみにこの兵士さんたちは、ユーリの部屋の前にいた護衛兵さんだ。

というか、この人たちがライに知らせたのだろうか。

「まったくお前ときたら……どこの国にメイド服に変装してくる王妃がいる？」

「か、返すお言葉ありません……」

「先ほどの脱走から懲りていないよな」

「それは……」

ちゃんとクレイたちに話したし、実際には脱走ではないと思うんだけど。

なんていったら、もっと怒りそうだから怖くていえないけどさ。それに、なんかさー……ライって過保護じゃない？

本当にこんな風に、私は行動を制限されていたのだろうか？

むしろどんだけ暇なんですかって思えてきたよー。

もちろん、この一週間でライに暇などないことは知っているけど……。

「とうさまー！」

「ユーリ？」

寝室で待機していたはずのユーリが、飛び出してきてライの足元にすがりつく。

驚いて、ライも固まったままだ。

「かーさまをおこらないでください！」

「しかし、ユーリ……」

すぐさまライが膝をついて、ユーリの目線にあわせた。

こうして並んでみると顔がそっくりで、しかも美形親子！

麗しい絵面で目の保養……ってふざけている場合じゃなくて。

「……サシャは、お前の母はユーリのことを忘れている」

「それでも、かーさまにあいたい……」

「ユーリ……」

幼いユーリの頬に涙がぼろぼろと零れ落ちる。

何度目の涙なのだろうか、すでに目は真っ赤にしていたのに。

日本だったら、まだ幼稚園に通っているような年頃の子供。

泣かせているのは……私だ。

気がついたら、勝手に体が動きユーリを抱きしめていた。

「ごめん……ごめんね、ユーリ」

「かーさま……」

「ユーリのこと、記憶なくしていても絶対に嫌いにはならないよ」

それだけは、絶対に言える。

だってこんなにも可愛いんだもん！まったく記憶がよみがえらないけど、これって母性本能かな？

でも何だっていい、ただユーリと会うためには説得しなくちゃいけない。

顔を上げて、ライをじつと見つめた。

「ライ、お願い……心配してくれるのも分かってる」

「サシャ……全ての記憶がないお前にも良くないことだ」

「それなら私は努力する！もうユーリのこととは大好きだし、王妃教育もがんばるよ」

やる前から、諦めるなんて私にはできない。

頑張っても報われなかったとしても……遠い昔のようで、今の私にとってはつい最近の記憶がどこかで痛む。

その痛みがあるのは、まだどこかに未練があるからかもしれない。だってあんなにも好きだったんだ。ちよつとでも話を合わせようと慣れないことをしてみたりとか。

でも好きだから努力しても結局親友とできちゃってたけどさ、超凹んだけど。

っとそれは一先ず置いて。



「だからお願い、ユーリと一緒にいさせて」  
「とうさま！おねがいします……」

眉を寄せ厳しい顔をしていたかと思うと、頭を押さえ心底疲れたようにライはため息をついた。

もう怒っていないみたいだけど、でもなんなのこの疲れた表情？  
え？ええ？

「……勝手にしろ」

くるりと後ろを向いて、部屋を出て行った。

怒ってはいないみたいだけど……もしかして呆れたかな？  
後ろに控えて見守っていた兵士さんたちも、焦った様子でライを追いかけて行った。

そして入れ違いで来たのは、クレイとアニーだ。

……ていうかクレイの女装姿、ユーリに悪影響じゃないか？  
さりげなくクレイが視界に入らないように、ユーリを後ろに庇う。

「……やるじゃない、サシャ」

「え、でもライって呆れて出てっちゃったよ？」

「あれは、呆れているんじゃないかって折れたのよ」

折れた？えーとつまり妥協した、ということ？

不思議そうな顔をしていた私に説明することなく、クレイは私の後ろに回る。

そしてユーリの頭を撫でまわしていた。

おおい！ちよつとちよつと、教育に悪いから勘弁してくださいよ！

「ユーリ殿下！お元気そうでなによりですわ」

「うれしいさまもお久しぶりです！」

……あれ？仲が良いよ？

でもクレイは私の後見人だし、そりゃ顔も知っているか。  
でもユーリ、あなたはこんな風になつてはダメだからね。おかー  
さんは全力で阻止します！

ああ、でもユーリだったら似合うかも……いやいや、やっぱりだ  
めだ。

ようするにライの女装姿になつてしまふ……なんて恐ろしいんだ。

「サシャ？また妄想してるの？」

「し、してないって！」

「ならいいけど」

うつ、前から妄想癖が……あつたんだろうな。

クレイは完全にまたかという顔をしているし、アニーは苦笑気味  
だ。

「それより折れたつてどういうこと？」

「だーからあ、陛下はなんだかんだいってあんたの激甘なのよ！」

びしつと人差し指をさされる。

わ、私に甘い？ライが？激甘？あのスパルタ教育を課せてくる人  
が、あれでか！？

ていうか人に指をさしちゃいけないって！

「ユーリはサシャ似だから、二人からお願いされると嫌とは言えな  
いのよ」

「だから、私に協力したのね」

ユーリと直接会つて、二人でライにお願いする。

正直それしか解決策はなかったんだろう。だから良いタイミングでライも来た。

でもユーリって私に似ているかな？どちらかというとライそっくりだけ。

頭を傾げているとアニーがフォローをくれた。

「雰囲気、といえますか。サシヤ様とユーリ様はよく似ていらっしやりますよ」

「そうかな？」

「ていうか、陛下は過保護なのよ。記憶のないサシヤが苦しまないためとユーリ様が傷つかないために秘密にしていたんだし」

隠してはいたけど、毎朝記憶が戻っていないか確認するライが落胆した顔をしているのは知っている。

そして時々何かを言いたそうにしていた。

本当はユーリが泣くたびにもしどかしかったんだろう。

でも私にはせかすこともしなくて。

何も言えなくなつて、クレイをじつと見た。

クレイは苦笑交じりの微笑を返す。

「さあて、問題も解決したことだし続きを始めましょう」

「へ？」

「へ？じゃないわよ。陛下からもみっちり教育するように言われているんだから」

クレイがにやりと真つ赤な唇を吊り上げて笑う。

まるででなく、まさしく「覚悟なさい」と言っている！

え？ええ？教育つて、まだ続けるの！？

つい先ほど、感動の再開を果たしたところなのに！？

「言っておくけど、あんたのレベルはユーリ様以下よ！ユーリ様のお手本をまず真似なさい！」  
「かーさま、がんばって！」  
「もう勉強は、いやだー！」

どうやら、わが息子ながら大変優秀であると知るのはこのあとすぐのことです。

やっぱり私の遺伝子はどこいったの？本当はライのクローンか？  
ああ、でも完璧なマナーのお手本を見せてくれた時の誇らしげなユーリはとても可愛かったよ！

というか私自身の問題は何一つ解決されていないということに気付くのは、まだまだずっと先。

すっかり忘れられている晩餐会まで、あと一か月。  
私はまだ何も思い出せていない。

## 9（後書き）

遅くなって申し訳ございません！

とりあずこの章は次の夜話2で終わりです。

ぐだぐだ展開で申し訳ございません。

少々スランプ気味なので、テンション高くできるように頑張ります。  
次もよろしければお付き合いください。

お読みいただきましてありがとうございます！

## 夜話 2

「ライ、ごめんなさい!」

「とーさま、ごめんなさい!」

「……なにがだ?」

執務から解放されて戻ってきたライが珍しく少し戸惑い気味に返す。

そりやそうか、夜に寢室へ戻ってきていきなり頭を下げられたら困るだろう。

しかも私だけじゃなくて、ユーリも一緒に謝っているのでライは交互に視線を送っている。

「いろいろ心配かけちゃって……ライも忙しいのに」  
「とーさま、ごめんなさい!」

しおらしく俯くと、ライは焦ったような素振りを見せた。

……クレイの言っていたとおりだ。

低姿勢な態度をとると、頭ごなしに怒れず戸惑ってしまうと教えられた。

そこをうまく使いなさいよ?というのもクレイのお言葉。  
い、いや!ちゃんと反省はしているけどね!

「……別に怒っていない。もういいから、顔を上げろ」  
「本当?」

ああ、と少し気まずいように視線を逸らした。というか照れてる？  
照れているのを隠すためかユーリを抱き上げて、ベッドに近づく。  
突然抱っこされて不思議そうだけど、次にはユーリは嬉しそうな  
表情。

「今日は三人で寝るんだろう？」

「とーさま！」

ユーリを真ん中にして、その横に私とライが横たわる。  
まさに親子川の字だ。

こうしてみると、やっぱりライって父親なんだな。

正直、子供いなさそうな雰囲気もあったんだよね。だからユーリ  
の存在には驚いたのなんの……。

ゆっくりと優しく、ライがユーリの黒い髪をなでる。

ユーリは片手ずつで、私とライの服の裾を握ったまま瞼を閉じた。  
まだどこかで不安なんだろう。そつとその手を握った。

「……今日は戻ってこないかと思った」

「なんでだ。ここは俺の部屋だと言っただろう」

ぼつりと出た言葉に、少しだけ不機嫌そうにライは返す。  
勿論、寝ているユーリが起きないように小声で。

「ね、ぶっちゃけさ、他の女の人のところに行こうなんて思わな  
かったの？」

「なんだ、ぶっちゃけというのは……というか俺の妃はお前だけだ  
と言っているだろう？」

わあ、今度は不機嫌そうだけではなく若干怒っている。  
びしびしと怒りの波動が……ライはオーラでも操れるのだろうか？

さすが王様……ゴメンナサイ。

「い、いやだってさー、私ってかなり平凡だし？」

正直、本当に恋愛結婚なのか気になったけど聞けなかった。

アニーは大恋愛の末に結ばれたとか言っていたけど、それどころかロマンス小説ですかって感じだし。

具体的なことは何一つ教えてくれないし。

いまいち信じられないんだよね。

それに、ほかの女の人のところにも行くチャンスだけど遠慮してたりしていたらどうしようもないし……。

「そうか？なら思い知らせてやろうか？」

え、と返す暇なく、突然紫の色が目の前に迫った。

ああ、ライの瞳の色とユーリの瞳の色は一緒だと気付く。

そして、ふっと唇に吐息を感じた瞬間、唇が触れそうだと理解する。

誰と、だれの？

……って、ううわあああああつ！！

その時の私の行動は素早かった。見事と褒めたたえたいほど素早かった。

忍者顔負けの回避行動で、私の世界は回った。

回ったというのは揶揄ではなく物理的に回ったのだ。

ええ、あの無駄に広いベッドから転がり落ちましたとも。

「ちょ、な、き、きき」

「大丈夫か？ちゃんと言葉を話せ。ほら」



元凶であるライがベッドから降りて手を差し出す。

なんだか恥ずかしいのか危険を感じてなのか、その手を取れずにいるとライは抱き起してベッドの端に座らせた。

その表情は……笑っている。それはそれはおかしいそうに。

なんかすつげム力つく！睨みつけるけど益々笑うライ。

どーせ、私の顔は真っ赤ですよ！言っておくけど、ファーストキスもまだの純真な16歳なんだぞ！

「悪かった。変なことはしない」

「まっただよ！」

「だが夫婦なんだからこっちのほうも少し慣れろ」

目の前に立っているライは自然に屈んで、おでこに触れた。

手とかではない、おでこの柔らかなこの感触は唇だ。

先ほど触れそこなった、あれ。

「ライ！」

「ユーリが起きる。ほら、寝ろ」

ライは悪びれる様子もなく、また同じ場所に戻った。

うー、納得いかない、非常に納得いかないけれど、私も同じ場所に戻る。

今後ライが近づいたら気をつけようという決意とともに。

目の前のライはほんのり上機嫌で瞼を閉じた。

こっちは心臓がばばれているんだけど！誰のせいだよ！

睨んで抗議するも、ユーリが起きてしまいそうだから何も言わない。

今日寝れるかな……そう思いながら私も瞼を下した。

でも不思議と嫌な思いはなくて。  
それどころか、なんだか幸せに満ちた夢をみたような気がした。

## 夜話2（後書き）

少し甘めを目指して失敗しました。  
いきなり変な展開で申し訳ないです。

次は私事都合によりもっと空いてしまいそうです。  
ですがよろしければ次回もお願いいたします。  
お読みいただきましてあがとうございました！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4454p/>

---

異世界でした！

2011年8月20日12時48分発行